

# Yong Officials' Camp 2014

参加報告書

札幌地区バスケットボール協会

土井 理美

## 1. 期日

平成 26 年 8 月 8 日（金）～10 日（日）

## 2. 会場

埼玉県上尾運動公園体育館

上尾市プラザ 2 2

## 3. 参加者

25 歳以下の日本公認審判員

男性 24 名 女性 16 名 計 40 名

## 4. 日程

### 8 月 8 日（金）

13 : 30 受講者受付

14 : 00 開講式

14 : 30 実技 I 「アジリティトレーニング等」

18 : 00 夕食

19 : 10 講義 I 「ルールについて」(DVD)

20 : 10 講義 II 「ルールについて」

20 : 45 班別ミーティング

21 : 30 入浴・就寝準備

23 : 00 消灯

### 8 月 9 日（土）

6 : 30 起床

7 : 00 朝食

8 : 00 移動

9 : 00 実技 II 「高校生男女モデルゲーム」

17 : 00 更衣

18 : 00 夕食

19 : 00 講義 III 「2 パーソンメカニク」(DVD)

19 : 40 講義 III 「国内外の現状等」

20 : 30 閉講式

21 : 00 宿舎へ移動

23 : 00 消灯

### 8 月 10 日（月）

6 : 30 起床

7 : 00 朝食

8 : 00 移動・実技準備

9 : 30 実技 III 「高校生男女モデルゲーム」

(各自帰りの交通機関にあわせて随時解散)

## 5. 講義参加報告

### 講義 I 「ルールについて」(DVD 講義)

講師 平野 彰夫氏

本講義では「Straight Line」および「Cylinder (Verticality)」について取り上げた。Straight Line とは、攻撃側プレイヤー、防御側プレイヤー、そして審判が一直線上に位置することである。つまり、確認・判定するために十分なスペースをとらえることができない状態である（ブラインド）。Cylinder (Verticality) とは、プレイヤーがコート上で普通に両足を開いて位置（ノーマル・バスケットボール・ポジション）を占めたとき、そのプレイヤーが占めている位置とその真上の空間を指す（第 33 条「からだの触れ合い」）。

ルールおよびそのルールに関連するケースを DVD で取り上げ、以下の点について検討した。

#### (1) 真上の空間の権利（第 33 条 - 2）

防御側プレイヤーのシリンダー内での触れ合いなのか、シリンダーからはずれた空間での触れ合いなのかを確認しなければならない。DVD では防御側プレイヤーのシリンダーを確認しながらその判定について検討した。

DVD では攻撃側プレイヤーと防御側プレイヤーとのスペースが捉えられる位置から確認しているため、その触れ合いがシリンダー内なの

かシリンダー外なのか容易に区別することができる。しかし実際にコートに立ったとき、DVDで見ているときと同じようにすべて区別することはできていない。それらを区別するためには、スペースを捉えることができる位置に移動しなくてはならない。

#### (2) ボールをコントロールしているプレイヤーとその防御 (第 33 条-4)

防御側プレイヤーが、ボールコントロールしている相手チームのプレイヤーに対して正当な防御の位置 (リーガル・ガーディング・ポジション) を占めているか、またそのトルソー (胴体) に触れ合いが起きているか確認し、触れ合いの責任について検討した。また正当な防御の位置を占めたプレイヤーは負傷を避けるためにシリンダー内で背を向けたりすることはさしつかえないが、意図的に体の向きを変えて防御してはならない。正当な防御の位置は、本来ならば相手プレイヤーに「向かい合う」必要があるからである。したがって、防御側プレイヤーは防御の位置を維持するために相手プレイヤーの動きと平行に (横に) あるいは後方に動いてもよい。言い換えれば、相手プレイヤーの動きと平行あるいは後方に動いている場合は正当な防御の位置を引き続き占めていることとなる。

#### (3) Basketball is "D"

(1) および (2) をコート上で捉えていくために、Basketball is "D" という意識をもつべきである。ここでいう "D" とは Defense を指す。つまり、攻撃側プレイヤーだけを捉えたとするならば、防御側プレイヤーが占めていた正当な防御の位置とシリンダーを確認できないまま、触れ合いにおける責任の所在を判定することになってしまう。さらに、攻撃側プレイヤーと防御側プレイヤーとのスペースを捉えられない確率が高くなってしまふ。

### 講義 II 「ルールについて」

講師 平野 彰夫氏

本講義では、「右に行く」リードの動きについて検討した。「右に行く」とは、リードに位置する審判がバスケットを越えて 5 番エリアと 6 番エリアがある右側に移動することである。多くの審判が日ごろから「右に行く」ことを意識しているが、何の目的で「右に行く」のだろうか。DVD では、右に移動したことで捉えることができなかつた現象などを確認した。右に行くことは、リードに位置する審判が担当するエリアで起きている現象を確認しに行くことを目的としている。加えて、右に行かなくては確認できないから行くのである。

目的を理解すると同時に、「右に行く」ことの危険性も熟知しておく必要がある。相手審判員の位置や目を当てているところによっては、互いの視野に入っていないプレイヤーが出てくる可能性もある。

### 講義 III 「2 パーソンのメカニク」 (DVD 講義)

講師 平原 勇次氏

本講義では、審判に必要なことについて、そして主にリードの動きについて確認した。

まず、以下の 3 点を審判に必要な理解としてご教示いただいた。第一に、バスケットボールの技術を理解することである。第二に、プレイヤーやコーチの気持ちを理解することである。第三に、コート上で起こっていることを理解することである。これらの理解を可能にするためには、マニュアル、走力、プレイヤーあるいはコーチとしての経験、コミュニケーション能力を駆使する必要がある。

次に、DVD でいくつかのケースを確認し、審判の動きで気になる点、そして自身ならどのような動きをするかについて受講生からも意見を述べ検討した。例えば、リードに位置する審判がエンドラインから遠すぎる位置にいるケース。6 番エリアと 5 番エリア付近でプレイが行われ

てから現場に移動してしまい、その後の4番エリアでのプレイに遅れ確認ができなかったケース。5番エリアでのリバウンド後の接触に対してニュートレイルに位置する審判が反応していなかったケース。以上のようなケースについて、どのような動きが求められるのか確認した。

#### 講義IV「国内外のバスケットボール事情等」

講師 橋本 信雄氏

本講義では、日本を含めた世界のバスケットボールの組織について（FIBA）、政治とスポーツについて、3×3の審判について、審判に必要なこと、コーチのアンスポーツマンライクな振る舞いについてお話しいただいた。

現在、FIBAは世界一のインドアスポーツとしてのバスケットボールを目指している。FIBA familyには、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニア、そして日本が属するアジアがある。今年2014年にはスペインでFIBAバスケットボール・ワールドカップが開催される。

また、近年3×3の普及が著しい。3×3とは、ストリートでプレイされている3人制バスケットボール3 on 3をFIBAが正式な統一ルールを設けバスケットボールの新種目として確立したスポーツである。会場はさまざまであり、一般市民が通り掛かるところに設置されることが多い。それにより、エンターテインメントの要素を含んだ新しい種目としての普及を目指している。審判の立場から見ると、その基準は異なる。あまりにも危険なプレイでなければ、プレイを継続させることが多い。そのプレイの迫力が3×3の見せ場でもある。現在はまだ少ないが、3×3専門の審判として活動することも一つの選択肢である。

さまざまところで活躍する審判であるが、より良い審判に必要なこととしていくつかご教示いただいた。例えば、タイムマネジメントや目標の設定である。バスケットボールは「時間」

に厳しい競技である。特に審判はいかなるときも時間を気にしておく必要がある。小さなことかもしれないが、時間の確認不足が重大なミスにつながる。それは大きな大会だからできることではなく、習慣として身に付けておかななくてはなしえないことである。したがって、日頃からのタイムマネジメントは重要である。また、目標無く行動をすることは成果につながらないことが多い。そのため、大きい小さい関係なく目標をもって活動することが重要である。

最後に、コーチのアンスポーツマンライクな振る舞いについて、ある映像を見ながらご教示いただいた。韓国の大学に所属するプロのコーチが審判に対して暴力を振るい退場となる映像であった。退場と審判が宣告した後も、コーチの怒りはおさまらず、なかなか退場をしなかった。このことから、日頃からのこのコーチのアンスポーツマンライクな振る舞いを許してしまっていることが予想される。コーチのアンスポーツマンライクな振る舞いは許してはならず、いかなる大会においても日頃から審判はそのような振る舞いについて徹底した態度をとらなくてはならない。

#### 【総括】

2日間にわたる映像を用いた講義を受け、文字としてのルール、自分がイメージするプレイ上のルール、そして実際のプレイ上のルールには少なくとも差があることを認識することができた。

マニュアルを熟読し理解することは必須であるが、同時にあるルールがどのような場面（プレイ）で適用されるのかを理解しなくてはならない。あるルールがどのような場面（プレイ）で適用されるかについての自分のイメージと、実際のプレイが一致しているか、基準の一貫性という点で重要である。講義の中で、あるルールと照らし合わせながら映像を見ることで、あ

るルールに対する自身のイメージを整理することができた。そうすることで、まったく同じプレイではなくても、類似したプレイに対しても一貫した判定をすることができるだろう。基準を作るという点が課題であるため、試合を重ねながら確立するとともに、講義で扱ったような映像を日頃から見ることもしていきたい。

## 6. 実技参加報告

### 実技 I 「よりよいプレゼンテーションの基本－体幹をつくるトレーニング・アジリティトレーニング」

講師 野田 拓司氏

野田氏より、以下の点に注意をしながらトレーニングを行った。

#### (1) 選手に負けないトレーニングを

選手はほぼ毎日練習を重ね、トレーニングを積んでいる。その選手たちと同じコートに立ち、審判として活動する以上、選手に負けないくらいのトレーニングをすることが望ましい。仕事との両立という点で難しいところもあるが、体力づくりには取り組むべきである。

#### (2) 姿勢の重要性

日頃から猫背になってしまったり、首が前に出ていたりすることがある。上半身の問題と言われることが多いが、実は骨盤の問題である。骨盤を前傾することで、背筋が伸びる。立つときには、足から頭までの骨が積み木のように積みあがっていることが理想である。真っ直ぐな姿勢での審判と、猫背での審判における見栄えの差は一目瞭然である。

#### (3) 体幹を鍛える

骨盤を前傾にして背筋を伸ばしたとき、それを維持するために体幹が必要である。寝ながら体幹およびハムストリングス・大臀筋を鍛えるトレーニングを行った。女性の場合、特にハムストリングスと大臀筋の筋力は落ちていく。瞬間的な動きも加えながら、トレーニングをして

いく方が良い。

寝ながらのトレーニングも必要であるが、その体幹を使うのは走っているときである。走っているときにいかに体幹が機能するかが重要であるため、走るトレーニングの際に体幹を鍛えることが最も重要である。

#### (4) 走力をつける

審判は1試合の中でコートをおおよそ100往復する。もちろん同じペースで走るわけではなく、瞬間的な動きが多く入ってくる。そのため、走るトレーニングでは100%の力でコートのエンドラインからエンドラインまでダッシュを行った(3往復×10)。その際に重要なのは、走り方である。体幹を意識し、背筋を伸ばしながら走る。その後も、コートの中を見ながらサイドラインを走るトレーニング、緩急をつけたトレーニング、バックランを含めたトレーニング、ラダーを取り入れたトレーニングを行った。

#### 【総括】

走るときの姿勢については、日頃トレーニングを行っていたが、今回まで走り込みをしながら姿勢を意識することは初めてであった。瞬間的にスピードを出すときは特に走る姿勢が前かがみになってしまう傾向にあるため、トレーニング中は常に意識した。

今回のような審判の動きを取り入れたトレーニングは何度か道内で参加させていただいているが、毎週継続的に行っているわけではない。今回実施したことも参考に、定期的にトレーニングを続けていきたいと感じた。また、ハムストリングスと大臀筋の弱さを課題として、また走力・持久力はこのまま維持・向上していけるようトレーニングをしたい。審判活動の中で、今回のトレーニングのように体力の限界に近づくことは多くはない。しかし、トレーニングにおいて限界まで近づくことを繰り返ししていかなければ、体力は維持・向上しない。改めて、

トレーニングの重要性を確認することができ、非常に貴重な体験ができた。

## 実技Ⅱ「高校生男女のモデルゲームを使い実技講習」

10名1グループの班を作り、各班に4名の講師が付き、ご指導いただいた。担当いただいた講師は、緒方崇氏、高城邦弘氏、前田喜庸氏、吉田憲生氏であった。モデルゲームは10分・2分・10分であった。

### (1) 第1試合 8月9日 10:15～

巢鴨 — 柏井 (女子)

主任：高城 邦弘氏

主審：土井 理美

副審：土橋 美陽 (茨城)

本ゲームでは、連続したパス&ランが主な攻撃となるが多かった。連続したパス&ランに対してバンプをして防御するその触れ合いにおいて、防御側プレイヤーが正当な防御の位置を占めているかを確認する必要があった。しかし、不当な防御に対して現象自体は目に入っても一定の基準で同様のプレイをすべて確認・判定することができなかつた。一定の基準で確認・判定するために、リードのときにどのタイミングで、どの位置に移動すれば良いか迷い、結局のところ支柱に近い位置にとどまってしまうケースが多かった。また、相手審判員との距離が遠くなり、どちらも現場に足を運べていないことがあった。

## 講 評

本ゲームについて、高城氏より以下のご指導をいただいた。

審判の仕事は、ファウルやバイオレーションを「判定する」ことだけではなく、プレイを「確認する」ことが仕事である。プレイが起きている現場に行くのも、判定にしに行くのではなく、そのプレイが正当であるかを確認しに行くことが目的である。プレイが正当に行われているこ

とを確認し、その中で基準外に値するプレイを判定していく意識をもつことが必要である。そのために、そのプレイを確認しているという存在感を出せるようになるとより良い。また、スペースを捉えようとする意識は見て取れるため、そのまま継続していくと良い。

### (2) 第2試合 8月9日 14:45～

柏井 — 都立駒場 (女子)

主任：高城 邦弘氏・前田喜庸氏

主審：土井 理美

副審：内堀 沙耶 (東京)

本ゲームでは、1試合目同様のパス&ランに対する確認、そして防御側プレイヤーの防御の仕方(特に手の使い方)をどの基準で判定するかが問題点となった。プレカンファレンスにおいても、パス&ランの確認、防御時の手の使い方について確認を行った。防御時の手の使い方については基準をもって確認することができたが、パス&ランに対してリード時に相手審判員にファウルを取り上げてもらうケースがあった。したがって、一貫性という点について改善の余地があると感じた。攻撃側プレイヤーに対して1人ないし2人で接近して激しく防御する際に、その現場に行き確認することが遅くれてしまい、正確な判定ができないことがあった。

また、他の受講生の方が審判をしている際に、講師の方からお話をいただき、特にリードにいるときには同じ場所に構えて待っているのではなく、常に足を動かしながら次に備えてコート上のプレイを捉えるように意識をした。

## 講 評

本ゲームについて、高城氏および前田氏より以下のご指導をいただいた。

【高城氏】全体としては見ていて安心でき、まとまったゲーム運びとなっていた。space watchingという点について、第1試合よりもパス&ランの捉え方、ドリブラーに対する横から

のプッシングについては判定できていた。しかし、今後より良い確認および判定をするために、あと半歩が必要である。準備不足であったり、適切なスペースまであと半歩足りなかったりしたときに、トレイルに位置する相手審判員が判定をしていた。

【前田氏】防御側プレイヤーの手の使い方について、攻撃側プレイヤーを腕で挟むような守り方は、触れ合いがあるとすればすぐさま判定をしなくてはならない。ゲーム中にファウルに発展する可能性があるプレイは把握しておく必要がある。

(3) 第3試合 8月10日 12:30~

都立足立 — 松山 (男子)

主任：高城 邦弘氏・吉田憲生氏

主審：佐竹 俊春 (高知)

副審：土井 理美

本ゲームでは、プレイのスペースを追い求め、どうしてもブラインドになってしまうケースの場合でも「~だろう」で取り上げることはしないこと、そして相手審判員との協力という点についてプレカンファレンスで話し合った。個人的にも、スペースを捉えきること (もう半歩移動する)、ファウルの基準に一貫性をもたせることを目標とした。

プレイのスペースおよび2人の協力という点では、エリア分担でもスムーズに進み、5番エリアでの防御側プレイヤーの面が変わる場面でもトレイル側から捉えられないスペースをリード側が確認するという動きができていたと感じた。分担・協力が機能したことで、自身のエリアおよびスペースに集中し、余裕をもちながら次に準備することが可能であった。そうすることで、講義でも話題となっていた防御側が占める位置やシリンダーを最初から捉え、判断することができた。一貫性という点では、ゲームのファーストコールで取り上げたファウルと同じようなファイルを試合中盤で取り上げることが

できなかった。その現象を捉えられる位置にはいたものの、おそらく集中力が欠如し判定まで至らなかった。

## 講 評

本ゲームについて、高城氏および吉田氏より以下のご指導をいただいた。

【高城氏】2人の協力という点で、お互いに吹きやすいゲームだったのではないかと感じた。そのため、お互いが自身のエリアに集中することができていた。

これまでの2試合で課題となっていた点を修正して取り組んでいた。スペースの捉え方などそのまま継続していくと良い。その中で、取り上げた方が良いもの (上述した試合中盤のファウル)、取り上げなくてもよかったものはあるが、全体的にはおさまっていた。また、スペースを捉えにいく際に、そのまま移動していけば的確な位置で確認ができるが、ときにぐっとステイをして後ろに下がる動きをするときがある。その点も修正を重ねれば、よりスペースを捉えることができる。

【吉田氏】男子のゲームにマッチしており、選手に負けないう走りできていた。走力は自身の武器として、さまざまな側面を補ってくれるものである。最後は巻き込まれそうになっていた場面もあったが、このままその取り組み姿勢を継続させると良い。

(4) 第4試合 8月10日 14:15~

朝霞 — 鷹の台 (女子)

主任：小坂井 郁子氏

主審：土井 理美

副審：平松 越百 (東京)

本ゲームでは、センター同士の攻防をいかに捉えるかが重要な点であった。身長の高い選手同士が、ポジション争いをする場面が多かった。そのため、触れ合いが起こった瞬間だけではなくプレイの最初から確認し、防御側プレイヤーが正当な防御の位置を占めていたかを確認する

必要があった。これまでも、防御側プレイヤーが正当な防御の位置を占めているにもかかわらず、ファウルの判定をしてしまうことが多かった。例えば、パスが攻撃側プレイヤーからずれたことでパスカットができたケース、体の接触はなくパスカットできているケースを防御側プレイヤーのファウルとして判定することがあった。そのときには共通して、接触・責任・影響を確認できるだけのスペースを捉えられていない。リードに位置しているときには、ポジション争いが起きそうなプレイヤーには注意を払い、いつでも最初からプレイが捉えられる準備をするようにした。しかし、そこで判定をすることがなかなかできなかった。スペースを捉えきれない位置にいる、プレイのはじまりを捉えきれずに判定するタイミングを逃してしまうケースが多いと感じた。

また、ゴール下のボールチェックについて、接触を確実に捉えられていたのか、防御側プレイヤーがシリンダーを侵していたのか確認なくファイルとして取り上げてしまった。

## 講 評

本ゲームについて、小坂井氏より以下のご指導をいただいた。

走って現場に行こうとする動きは良いので、そのまま続けること。ゴール下での防御側プレイヤーのボールチェックについて、触れ合いが起こっているかを確認する必要がある。そこで触れ合いが起こるだろうという予測は準備にもつながるので悪いことではないが、その後は必ず確認をしなければならない。

インサイドプレイヤーの攻防について、リードに位置する審判は、プレイのはじまりを捉えるよう注意する必要がある。その接触がどちらのプレイヤーからはじまったことなのかを確認しなければ、罪なきものを罰することになる。

## 【総括】

YOC では、基準の確立と一貫性を課題として取り組んだ。また、初めてお会いする相手審判員とのコミュニケーション（プレカンファレンスや試合中の調整など）も課題とした。

基準の確立という点について、いかに自身の基準が曖昧であったかを思い知らされた。講義でルールと実際のプレイを照らし合わせたことで基準が整理され、実技においてその基準を当てはめていく作業を通して、さまざまなプレイに対してもその基準を適用できるようになった。頭の中で整理し、実際に動いて判定するという流れで取り組んだため、スムーズに身に付けることができた。しかし、その中でも判断できなかったプレイも多くある。3日間で得たことは多いが、そのままにしておけば再び基準が曖昧になる可能性が高いため、今後も映像等を駆使しながら自身の基準を確立していきたい。

それに伴い、1試合通して一貫した基準をもち取り組まなければならない。この点に関しては、実技講習での4試合すべてに共通する課題であった。一貫した基準を保つために、もちろん自身の基準が確立されていることが前提条件である。一方で、その基準は、体力、集中力、精神力等の影響力を受け曖昧になったり、一貫性が欠けたりすることがたびたびある。したがって、審判としての体力を維持・向上することは必須であり、全集中をコートに立つ選手、ベンチ、相手審判に注げるようにならなくてはならない。基準の一貫性を保つために何をすべきか、このYOCで学んだ点だと感じた。

上記の2点におけるスキルを向上するために、スペースを捉え常に動き続けること、相手審判員との協力が必須であることの重要性を再認識できた。

## 7. YOC 総括

YOC では自身の長所、そして課題となる点により明確となった。特に課題としている点は、

その課題に関する成功体験を広げていき、どうして上手くいかなかったのかだけではなく、どうして上手くいったのかからヒントが得られるように今後も学んでいきたい。そのような点でも、ご指導いただいた講師の皆様には、課題の中でも成功していた点なども丁寧にご教示いただき、次につながる貴重な経験となった。今後も自身の特徴をいかしながら、直面する課題を真摯に受け止め、審判活動に取り組みたい。

上記にも関連することであるが、自身の課題を達成するために何が重要かという点について YOC で多く学べたと感じている。課題を挙げればきりが無いが、その課題を達成するためのステップを細かく設定し、自身で評価することは非常に難しいことだとこれまで感じていた。実際に、どうすれば課題を達成できるのか理解が及んでいないところもあった。多くの講師の方からのご指導、そして受講生の方々からの刺激があり、課題達成までのプロセスをイメージすることができた。課題までのステップを日頃からの審判活動に取り入れることができれば、課題達成に近づくことができるのではないかと感じた。

最後に、全国にいる同世代の審判員と交流できたことは非常に良い刺激となった。地区での指導や審判活動に関する事など、学ぶことが多かった。

## 8. 謝辞

この度は、非常に貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。本講習会にあたり、ご支援いただきました北海道バスケットボール協会の皆様には心より感謝申し上げます。

北海道バスケットボール協会の皆様、札幌地区バスケットボール協会の皆様、北海道クラブバスケットボール連盟の皆様におかれましては、日ごろからのご指導に心より感謝しております。

また、お世話になりました多くの皆様に深く感謝申し上げます。

以上